

# 金正恩（キム・ジョンウン）朝鮮労働党総書記の訪露が意味するもの

令和5年10月17日

森田晃司

金正恩総書記が本年7月に、四年ぶりの外国要人との接触となる、ロシアのショイグ国防相との面談を行いました。これに続き9月12日には訪露し、13日にプーチン大統領と面談、その後も軍事施設や造船所を見学して帰国しました。

金総書記は「戦略的に重要な会談だった」と述べていますが、この訪露は何を意味しているのでしょうか。

## 1. 北朝鮮の存在意義

アジアの最貧国の一つで、金王朝による独裁が続き、ならず者国家とも呼ばれています。ところが、国民の大半は極貧にあえいでいると伝えられる中で、堂々と核開発を進め、国際政治の上で存在感を見せています。

米国のCIA, 英国のMI6, イスラエルのモサドなどの諜報機関は活動のために巨額の闇資金を必要としますが、麻薬、武器の密売など北朝鮮を利用しながら資金を得ているとの観測があります。

また、英米などの軍事産業は北朝鮮を利用しながら軍事緊張を作り出し、周辺諸国に武器輸出をしてきているとも指摘されています。

従来、表面的な対立とは裏腹に米国との結びつきが強く、実質的には従属してきたとも言われるが、今回の訪露は、米国からロシア依存への転換を意味するのか、

それとも北朝鮮伝統の米、露、中国、日本などを手玉にする揺さぶり外交の一環に過ぎないのか、注目される。

## 2. 国際情勢

### ① 米国の衰退

過度のLGBTQ保護や人種差別反対運動などによる既存のモラル、文化の崩壊が進む一方で社会の分断が深まっている。

金融勢力、グローバル企業もこうした動きを推進、あるいは、助長している。

建国の英雄たるワシントンやジェファーソンの銅像の引き倒しなど伝統、歴史も崩壊の危機に瀕している。

子供教育も乱れている。

大都市を中心に治安、衛生の悪化など社会の混乱が広がっている。

ウクライナ戦争への過度の支援に疑問が広がっている。

司法の武器化が進んでいる。

ケネディー大統領暗殺、9.11 事件、コロナ大流行とワクチンの強制などに対する不信や真相追及の動きが強まっている。

WHO、ユネスコからの脱退も議会で論議されている。

気候変動に対する疑問も広がっている。

メキシコ国境からの大量の難民の流入に対する批判が強まっている。

バイデン親子の海外からの賄賂受け取りへの批判が強まっている。

政治、マスコミへ国内外からの不信が高まっている。

米国社会全体の銃保有総数は4億丁を超えると推定され、分断が進めば内乱勃発もありうると懸念されている。

米ドルの、基軸通貨としての信認に懸念が広がり始めている。

次期大統領選挙は2024年11月。

## ② 中国の動向

相変わらずの隠蔽主義で、内部の様子はよくわからない。

ただ、外相、国防相の失脚が相次ぎ、習近平体制に軋みが出ている、あるいは、習近平主席の国防軍支配が揺らぎ始めているなどの観測も出ている。

英米の金融勢力が育て、世界第二位のGDP大国にまで押し上げてきた共産党独裁国家も曲がり角に来ている。

不動産危機、金融危機が叫ばれ、生命線である外資の流入が減少し始めたとの観測もある。

## 米中関係

中国共産党の育ての親は米英中心の金融勢力。政治的には対立を装いながら、中国の安い労働力を不当に利用して、金融勢力側も収益を享受してきた。

政治対立、経済連携の構図は今後も継続されるのか？

それとも、米国の衰退を見て、中国も離反するのか？

## ③ ロシアの動向

プーチン大統領は、ロシアの言語、伝統、文化を死守するゆるぎない決意のもとに、グローバリズムと徹底的に戦い抜く覚悟を固めていると思われる。

国内外の演説で、プーチン大統領は、繰り返し、金融勢力を徹底的に倒す、欧米の悪魔の政権を倒す、伝統をつぶす政権を倒す、と堂々と表明している。

また、現在の欧米政権はソ連時代のボルシェビキ政権と同じと非難している。

エリチン元大統領が売ったロシアの天然資源をユダヤ系を中心とした金融勢力から取り戻したプーチンに対するロシア民衆の支持は熱く固い。

ロシア人は強力なリーダーを求める傾向が強いそうで、国内政治は安定しているのではないか。

ロシアは、エネルギー、食料を自給し、米国と並ぶ核大国。戦争に負けない体制ができている。

プーチン大統領は2014年以降の歴史、国際情勢などを熟慮の上、覚悟をもってウクライナ侵攻に踏み切ったのではないか。

トランプが再選されれば、グローバリズムに対抗するトランプ・プーチンの連携が始まる。

セルゲイ・カラガノフの論文（2023年6月発表）

（経済・国際政治・核戦略専門家でロシアで最も影響力のある学者と言われている）

ロシアは歴史的に周辺各民族の侵攻を受けて来て、混血。ロシア人は、欧州よりもアジア人の血が濃い。

ロシア人は、エリチン時代（米国はクリントン時代）の悲惨な経験もあり、共産主義も、資本主義も、民主主義も嫌い。

欧米の真似をすると失敗する（エリートは欧米好きが多いが）。ロシア独自の道を歩むべき。

ウクライナ戦争をきっかけに欧州と距離を置き、むしろアジアとの連携を深めるチャンス。

ロシアは戦争を終わらせるために、NATOに核攻撃をする覚悟ができてい  
る。その場合、NATOは崩壊し、反撃できない米国の“核の傘理論”の欺瞞  
が露呈し、米国の権威は失墜する。

#### ④ 欧州の衰退

アフリカ、中近東、ウクライナなどからの難民の急激な増加が様々な社  
会問題を引き起こし、暴動も発生している。

今に続く植民地政策の残滓か、西アフリカではニジェール、ブルキナフ  
ァソなどでフランスへの反発が表面化している。

過度に再生エネルギーを重視するエネルギー政策の失敗によるインフレ  
およびエネルギー不足が大きな社会問題となっている。

ドイツでは基幹産業である化学企業がエネルギーの高騰による経営難に  
陥っている。

ウクライナへの際限のない支援に不満が募り EU 内部でも、ハンガリ  
ー、スロバキアなど明確に支援停止を求める政権も現れている。

ドイツ、フランス、イタリアなどで反グローバリズムを掲げる政党への  
支持が広がっている。

#### ⑤ 中東の動向

米国の影響力が大きく後退し、逆にロシア、中国の存在感が増してい  
る。

金融勢力による分断統治による相次ぐ混乱に目覚め、中東の内部対立か  
ら脱して和平に向かう機運が高まっているように見える。

イスラエルと周辺国、サウジアラビアとイランなどに和平の動きが出て

いる。

一方で、2023年10月6日、イスラエルとハマスの間で軍事衝突が発生、今後の展開が懸念される。

#### ⑥ グローバリズムあるいは、欧米の影響力の退潮

G7の下請け機関ともいえるG20は、2023年9月にインドで開催された会議では、ロシア非難さへ共同声明に盛り込めず、G7の影響力の低下は覆い隠せなくなっている。

習近平に至っては、その理由は定かではないが、G20の会議に出席さえしなかった。

ロシアへの経済制裁も欧米以外の国はほとんど参加していない。

グローバルサウスと言われる非欧米の国々が台頭してきているが、必ずしも欧米の指示に服従しなくなっている。

グローバルサウスの代表格であるBRICSは、2023年8月に、アルゼンチン、エチオピア、エジプト、イラン、サウジアラビア、アラブ首長国連邦(UAE)の8か国が新たにメンバー入りすると発表している。

### 3. グローバリズムとナショナリズムとの戦い

過去二百年、金融勢力が中心のグローバリズムが金の力を背景に拡大を続けてきたが、世界各地で民衆が目覚め始め、ナショナリズムが反撃を強めている。

一方で、グローバリズムは、金融勢力が持つ圧倒的な金の力にまかせて、パンデミック条約の成立や世界保健規則の改正などの準備を着々と進めて、WHO, 国連を通じての世界一極支配の完成を目指している。

世界の民衆が目覚めにより、潮流は変わったのか、  
それとも、グローバリズムによる世界の一極支配が強まるのか、

日本は相変わらず、閉ざされた情報社会の中にある。日本国民はつんぼ状態にあって、居眠り状態が続いているかのようだ。

以上

